

福島で見たもの

～今すぐ原発からの全面撤退を

大津あいあい保育園長 下村 勉

先に滋賀私保連の研修で福島・宮城を訪れた。これはそこで見たもの、思ったことである。

荒涼たる大地。失われた広大な国土。

津波で海水をかぶった土地、放射能を浴びて近づけない土地、もとは黄金の稲穂が実る田んぼだった広大な土地が荒れ果てたまま放置されていた。何とももったいない。

今、日本は小さな無人島の領有権を巡って近隣諸国と係争しているが、その数千倍もの国土が失われているのだ。津波だけなら数年すれば何とかなるだろうが、放射能は数万年消えることがない。原発事故がかぶさった震災はいつまでも人の命を蝕み続ける。

一年半たっても復興が進まず、荒地のままなのに、墓地の墓石だけがいかにも真新しい。津波で多くの墓石が流されたが、今そのあとに黒光りの御影石の墓石が林立している。墓地の再建が先行したようだ。多くの人の命が失われた震災を象徴している。何とも悲しい情景である。

自然に触れられない保育。事故原発から20数キロの保育園。

福島県の太平洋側（浜通り）の南相馬市内にある二つの保育園を訪れた。そこは爆発事故を起こした福島第一原発から二十数キロのところにある。事故から半年後に保育が再開されたそうだが、正常な保育の姿はなかった。園児たちは30分程度しか外で遊べない。「園庭で虫やアリを観察するときは腕組みをさせる」という。土に手を触れさせないためだと聞いて悲しくなった。バスで高速を2時間も走って園外保育に。お泊り保育は東京で。子どもたちが自然に触れて遊ぶ環境がなくなっていた。

救援物資のなかに、各地の名水が詰まったペットボトルの箱が積まれていた。落葉がいっぱい詰まったビニール袋があった。健康な水や落ち葉を福島の子どもたちに届けようという各地の人々の心遣いである。



園庭の遊具は、飛来する放射性物質を毎日、拭い取らなければならない。自然はあっても、触れることができない。(左) 子どもたちへのプレゼント(救援物資として贈られてきた落ち葉)。(右)

「除染ではなく、移染ですね」。 除去できない放射能。

園舎や園庭の「除染」作業が職員やボランティアの手で大々的に行われたという。園庭は20センチ以上掘り下げられたが、あとに入れられたのはなんと碎石。痛くて裸足では歩けない。通路部分にはビニールシートが敷かれていたが、とても安心して遊べる園庭ではない。屋根や園舎は強力洗浄器で洗い流されたが、放射性物質は水路に流され、近くの汚泥の中に蓄積されている。園長は「除染ではなく、移染ですね」と自嘲気味に「除染」の実態を語っていた。

見えない敵（放射能）との戦い。命に敏感であらねば。

園の入り口付近に大型ガスボンベのようなモニタリングポストが設置されていた。測定された放射線量のデータはリアルタイムで文部科学省に送られているそうだ。ほかに簡易測定器で園舎内外の6か所の線量も毎日測定され、玄関に掲示されていた。測定にあたって副園長の「子どもの命を育む仕事をする者は、子どもの命に関わることに常に敏感であらねばなりません」という言葉が耳を離れない。

保育再開後も戻ってこない園児が多く、また、職員も大量に退職した。だが懸命に保育は続けられている。保育者たちは毎日、屋外の遊具に付着する放射性物質を雑巾でぬぐい、食材の検査を続けている。見えない敵と戦いながら、子どもたちの健康を気遣っている。そこに子どもたちがいる限り保育は続けられるだろう。

「福島のことを忘れないでください」……園長の言葉が忘れられない。

原発固執をやめて、自然エネルギーを。

地震は天災である。だが原発事故は人災である。天災と人災が重なった被災地にもはや未来はないのだろうか。

原発は経済的効率を優先し、人の命を軽視した。もともと原発に「安全神話」などなかった。その結果、恐れていたことが起こった。最悪の事故が発生してしまった。事故を起こした原発はもはや制御できない状態に陥っている。近づくことさえできない。今も放射性物質の放出が続いている。健康侵害が地球規模で進行しているといつてよい。最悪の状況が進行している。

このような最悪の経験を経たにもかかわらず、懲りない人たちはなお原発に固執している。今すぐにも原発から全面的に撤退すべき時であるのに、なお20年もそれ以上も原発を維持しようというのは、正気の沙汰とは言えない。

大切なのはいのち、命、生命である。子どもたちの命である。子どもたちの未来を奪うようなことは断じて許されない。

「太陽の恵み」こそ未来への道。

しかし、深刻に考えることはない。未来への道はある。「太陽の恵み」を活用すれば、人間生活に必要なエネルギーは十分に確保できる。原発の廃棄物処理や事故処理に費やす費用のほんの一部を回せば、太陽光や太陽熱など自然エネルギーが全国民の健康な暮らしを作ってくれる。

電気は実に便利で、不可欠なエネルギーである。太陽光発電によって、この電気を私たちの手でも作れる。多少の資金は必要だが、8年程度でバックペイできる。

全ての保育園が太陽光発電を！

屋根を持つ市民は、太陽光発電で電気の自給を！

健康な地球環境は、健康な保育環境をつくる大前提である。被災地を訪れて、改めて痛感したことである。

(2012. 10)